繪本拾遺信長記

五

へ
3564
5

門 へ13
號 3564
巻 5

慶應義塾図書

繪本拾遺信長記初篇卷之五

目録

川合に籠岸両砦合戦之事

柴田勝家勇力

勝家歓の雑兵と拷問に

佐々成政勇戦

攝州石山合戦之事

塚本小大膳討死

信長陣を中備へ移に

慶應義塾大學図書館
昭 34.6.3
藏 書

小田信長石山本願寺を責る
給木源市勇戰
信長平地へ級を送る
森摩恵多欲ゝ齒噬
平地に怪異之事
地村城中寺討死之事
信長紋軍明智光秀の危難を救ふ
平地口の曉天
本願寺明田

續本拾遺信長記物語卷之五

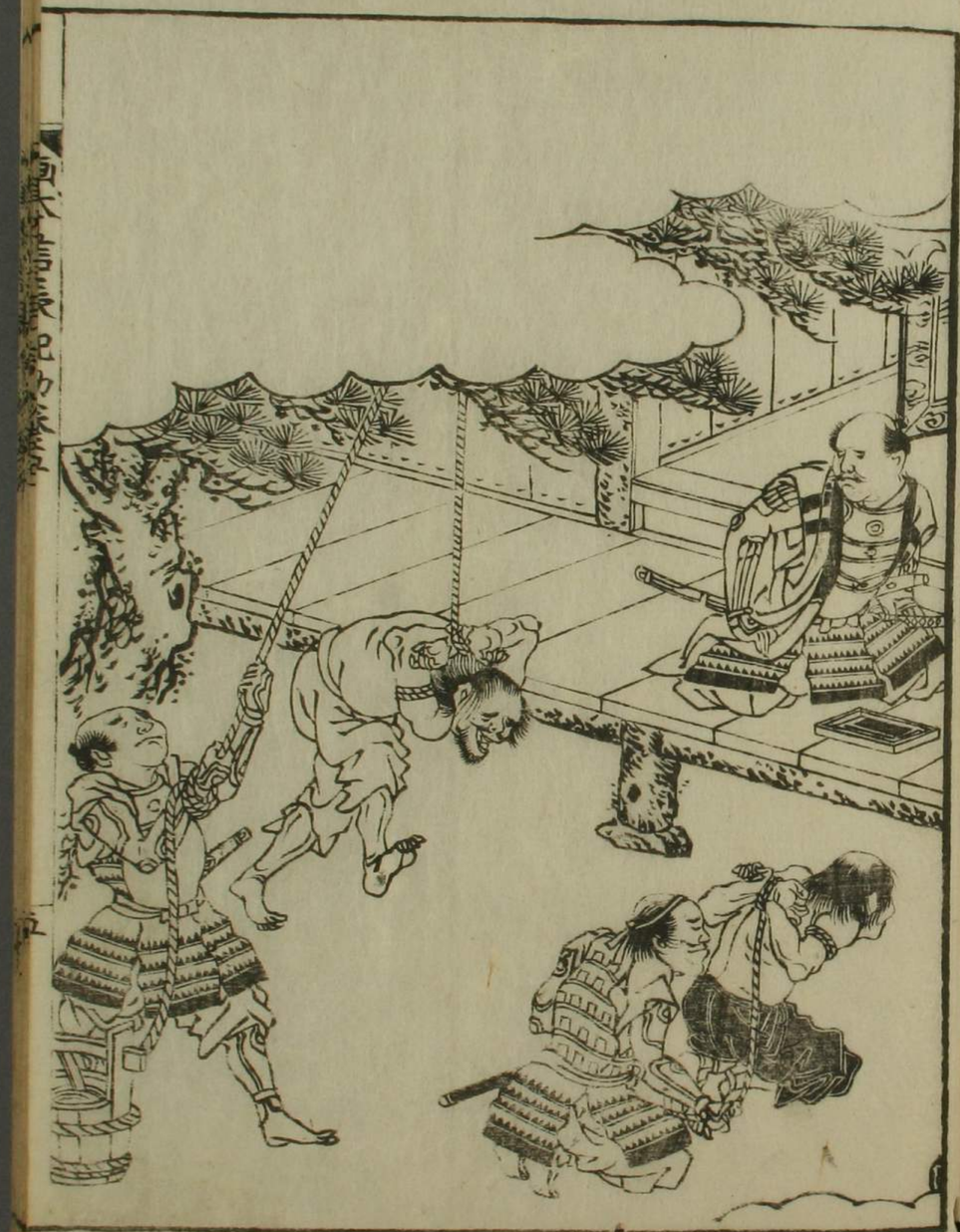
川内口籠山手両砦合戦之事

小田彈正忠信長卿高水のゐる陣所に[illegible]ひしめくる敵は
を近らせるき丘より南妙法蓮華經の大纛を立させ敵軍を
集めゝるを小庵を夢る者多しとゝぐも討死後より三十余人
三好勢の敵討せ体よりて何さまよい鬼神の面形の天
狗ゝどの仕業ゝ怪ゝむ者も多ゝ附ゝ日田隆二郎
勝家信長の御前に参り言上ゝ某地獄御本陣（近畿）
ゝ敵方の軍勢ゝ出合敵勢ゝ[illegible]
人を生捕何ゝの[illegible]ゝ屬せ者ゝ[illegible]
どしく本願寺の門後ゝ[illegible]ゝ白状ゝ及びい年[illegible]の騒動ゝ

柴田勝家
勇力

憎悪情を[illegible]の所如ものが不覚[illegible]
[illegible]本願寺に勢と向ら[illegible]御征伐[illegible]
安うしぬのを[illegible]りのうる枝に本願寺の悪徒多三好の一党[illegible]合
[illegible]御[illegible]ねる軍勢に敵対をるとも[illegible]ゆるで今いまは[illegible]雖[illegible]とく門徒
退治のを配りを及びをるを信長左右と看て此日近郷の者ども
陣中を乗り[illegible]を[illegible]ひせし百姓ども[illegible]今を陣中を止さう
居るや探りよと下知せらるれば[illegible]石[illegible]河内守[illegible]
[illegible]く雲く陣中を求[illegible]ども[illegible]きのの百姓一人も居らざりしとや信
長歎じて我日来本願寺と悪むの源しとらへども[illegible]を[illegible]
小児の辯をるるでく[illegible]んせしを誰う計ん所如坊をかくまく
謀計と紛いんとい[illegible]渠が門徒の[illegible]を軍郷の武士ありて本願寺と

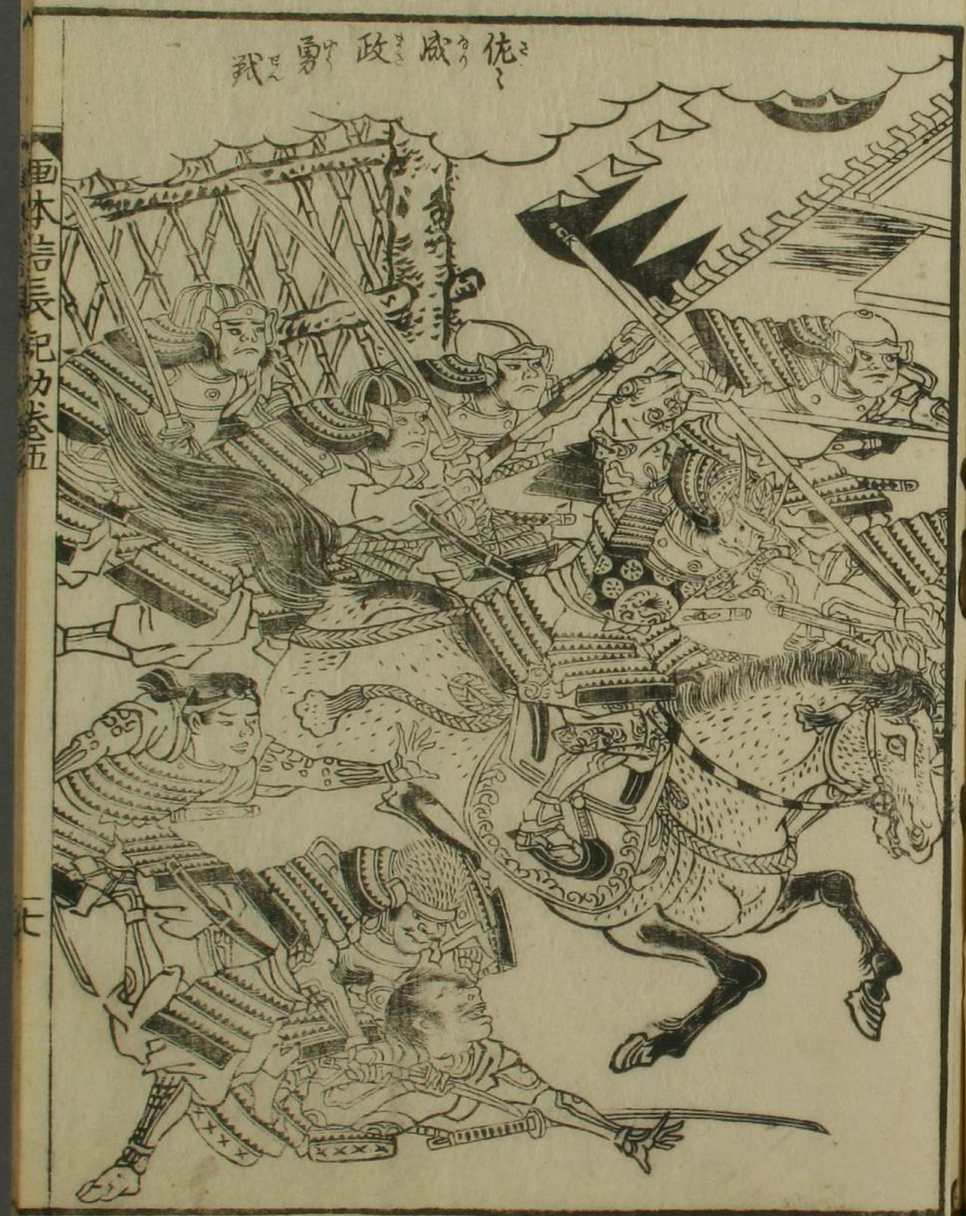
聊るとも[illegible]へう征伐延引せば[illegible]雖[illegible]我[illegible]軍を二
[illegible]分ち一[illegible]い柴田勝家と大[illegible]三好が[illegible]の新城
を責させ我自ら一[illegible]引て本願寺を[illegible]
既[illegible]とも知あるを[illegible]津村後逆を宿陣せ播州勢退く
後進[illegible]るい本願寺と[illegible]
の城へい本願寺より[illegible]坊を大[illegible]して其勢九三[illegible]
計に方を囲んで責[illegible]甚急すう[illegible]
とをれるし[illegible]軍兵三[illegible]計に附[illegible]
るを[illegible]御加勢[illegible]
[illegible]き川分口[illegible]岸い味方[illegible]
さらへ[illegible]麻手裏多政[illegible]門多久間信[illegible]

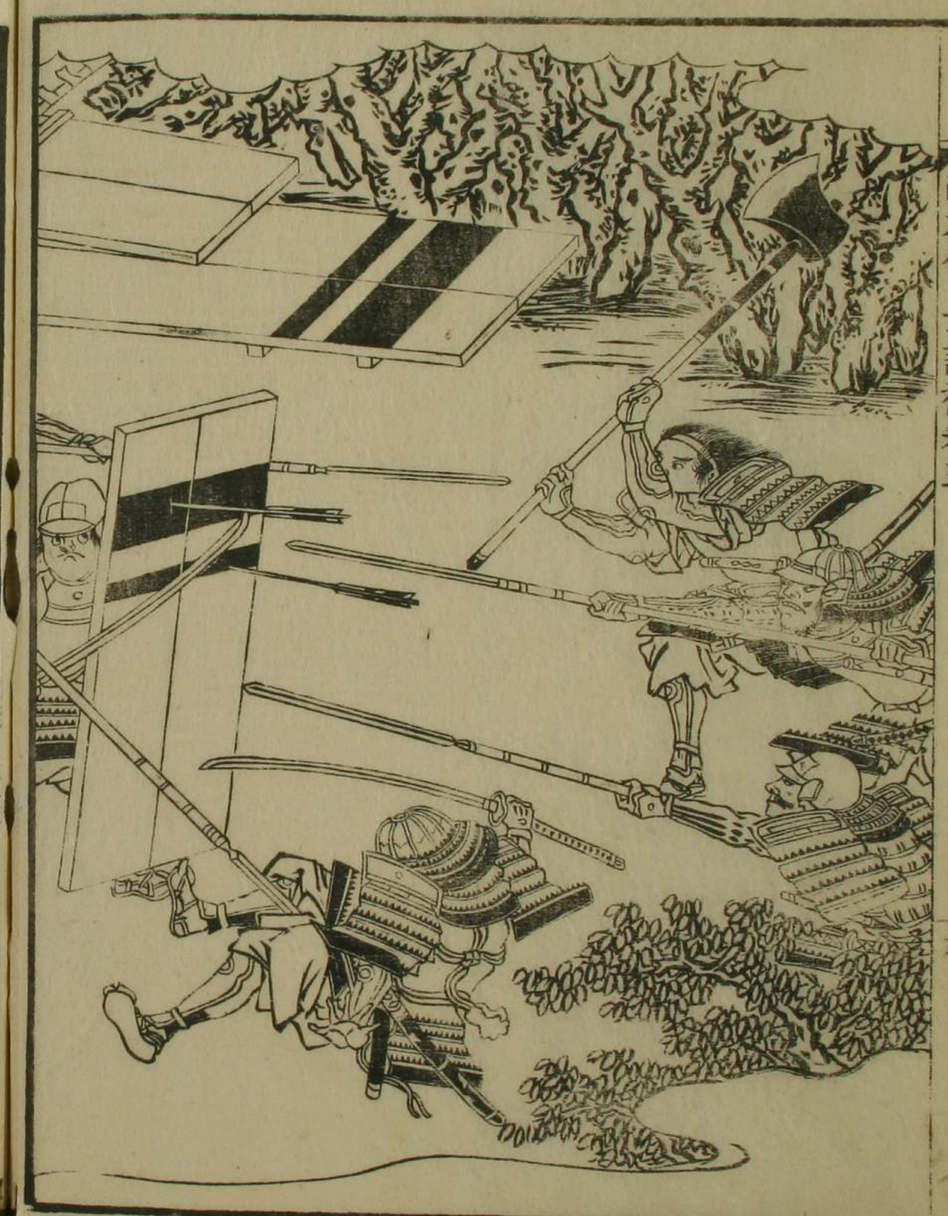


勝家歎の
雑兵と
拷問い

濱守なる人二万余人の軍兵とる人両城と後詰せむ拠もなきき
川分にの岩くい手を賢物伝、内義伝城中小大膳伝義一伝
濱門なる人三百人籠城せ」る石山勢三る余人ひさくと押よせ鉄
炮をあうけ柵と倒」逆茂木を引のけ乱入るけ乱入るる
城と守る大将伝、内義伝城政い大膳亮歌の勇兵なれば城
寺の一揆衆何程のなう仕出さん切て出く蹴散せすと城兵又
百余人と引まけ城中小大膳ともろともに城戸を開きて歌き
出辛うもんるなるの中と巳の刻十人宮に新出しけ」と
いさ〳〵」なるの大勢俗人をつけくまて計引さうる山なる乃大
将常楽寺大きに小勢りきたるき者ともがありさまうる歌を
小勢ぞ鉄炮をそ打をもめひるむ不人後詰なんとと勢のいさうを

知るるふぞ三百余りの鉄炮の筒先と揃へ押一並べ八方一斉う
火蓋を切り先を進ま」城兵百余人だ〳〵と打倒され義伝
城中小大膳伝鉄丸を命と落」ね伝く政芸を見く毛髪逆
逆を立より三尺余りの大刀の抜うく〳〵と打をる乱雷光乃
ごく飛うにまく〳〵内を十人ほい誘篝を乱て寄うせうれば
城兵芸を力を拉く踏込〳〵志の〳〵と削り戦ふるる小兵乃義
芸を中〳〵人なる籠岸の岩へい城真寺三る余誘うて押寄
櫛竹葉と懸るく〳〵い〳〵毒」て寄る山城の大将福島孫藤
寺一撤光孫を乱の勇士うれば城の搦面を数百挺の鉄炮を
かけうく〳〵歌と矢伝を引せどに一日を打敵ち鉄炮烟の清ざる中
より門を開きて切て出く〳〵まくを持う立ていさ門く引人の鉄炮


佐藤政勇戦
西林信長記功巻五


西林信長記功巻五

てあまたは二陣計りに合戦し勝負はかんばしからざりけるとき
信長かの後詰の勢摩恵多多久間彦林一万余騎と二手にわけ
ま川分口より義岸より一文字に押寄り敵の後より囲と懸く
討てうれば城中より是に切て出て挟て新立城石山
勢さんざんに討なされ両城ともに囲と解き本願寺と為
引物を迎に者と小田の大軍隊を乱て七八丁退討るふ
忽ち一揆の鉄炮耳に響くと雖波今宮の林の中より
南蛮不可思議光如来と書たる九曜の大纛又十余流風なびく
七段の方陣の石山勢周と懸り鉄炮を放ちうけ小田勢の後と包ん
で雲霞のごとく押まはる小田方のねし兵と見て取れ本願寺方
も軍勢を二向けうるぞ一向て崩て退散せしそさぶ軍に別

うる勇士摩恵多多久間彦林稲葉伯耆守軍使へと三陣に引
分荒後に崩り左右に寄て噪き叫んで戦へば石山勢もこれ
に佛敵を敵して法恩を謝せよと呼わり斬をも突て厭
ひるく入乱れて戦へるぞ両軍死傷の者数を知らざりけり
も西の空に傾きけるも大雨篠を乱して降来れは戦も是にて
こそ相引に成ける物とうるを見て小くに東へ引去りぬ
摂州石山合戦之事
桐もしけ附川分口義岸へ向ひうる後詰の勢信長卿の本陣へ立
寄り合戦の次第つまびらかにうかがふ上に堀本小太郎が討死の事
よれば信長いよ〳〵憤りさらば先本願寺と云囲
と為べし其後に三好と征せんとて二万余騎と柴田勝家に援

塚本小次郎
討死

て理田福源の三好勢よりおさしめ自己一万余人の大軍をもつて発し元
亀元年九月十八日中津川の新城を押潰り本願寺の末摂
並村を経て天王寺より陣を布け石山表の様子を窺
め次第をまりうて押よせる拾と乃石山の地形く謂い西は
漫くたる大海ゆく潮満干辺大江の岸を洗ひ人馬の往来な
しかく小の方より淀川の大流横たり六国の水帰合せり東は
摂大沼ありて数里より蔓り大和川を中と西り流れ翼るし
て近寄がたし南一方は平地より続き石山往来の正面とせり此故
より信長小の方中源の本陣より南乃方天王寺うり軍勢を
押まはし石山よせ寄らんとて実の居所の要害天下第一乃
城地なり和も信長の先陣なる計多在三郎林佐源等安上来

助福島平左衛門尉く村三十郎湯浅甚兵衛等二万余人本
願寺の柵際へひさくと押よせ周の森天地を動しかけきつるを
見とりし附城中の軍兵も周の森を合せて静りかへりて居
ろうず拾本願寺より の矢倉の矢狭より弦をくとしてそこ
ろせば城の樋間矢倉くよりけ並べる鉄砲の筒先を揃へ一度
よと打出せば寄小つまるく例る武者い為基例より矢るうに
陣御乱まるく丁計敵をざうに附かいかそと寄手が指揮よ
陣ひ拾本願市門徒の道平六百余人和漢より引連門を開き
く流星の落う度ごとく進一文字よりの大軍を引連くたり
くと斬落るよせよの大軍驚き恐まに又丁計も崩まる
拾本願市逃る敵と追ぶてはかろぐく勢と引上げ門と固め

信長
陣を
中條へ
移し

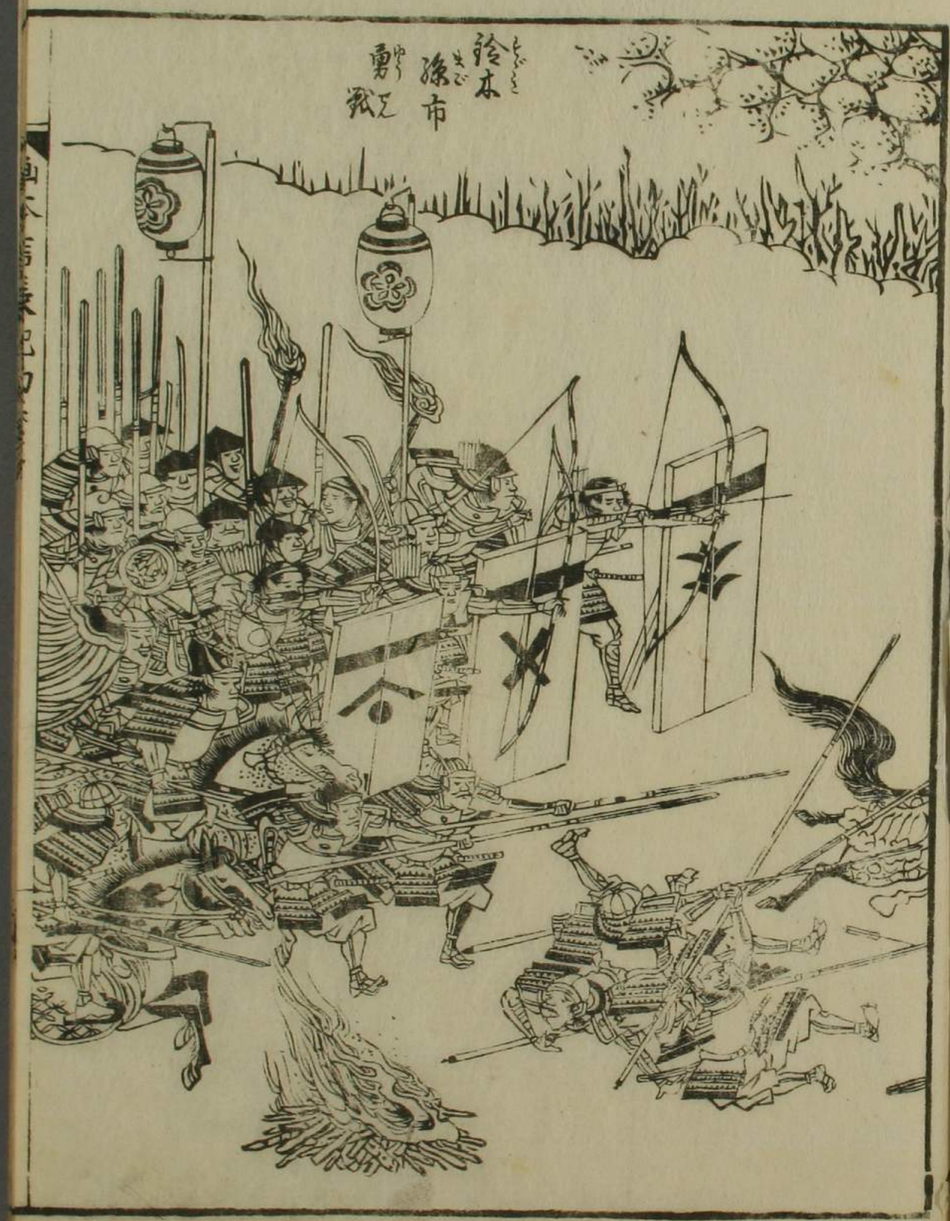
寄るぞ勇」うりゐるふるまひなり信長先陣の軍利ありと見
くいよ〳〵始り後陣の侍へをくり出自来砲と打ふり攻鼓を鳴
し只一うちと責詰うり山をにをくむ軍勢すは摩恵多敵左衛門
身家明智十兵衛光秀多久間右衛門尉信盛森三左衛門尉
左又郎左衛門長秀氏家出陸入道卜全伊賀伊賀守多武
一万五千余騎信長の軍勢を勝さを指揮竹来と四方きつ五忍いく
勢と合せ責うりゐ山今や山構へ踏るらんと見へく抜そろし、
山附日光西山又洗を霄闌のいと晴ゐれば合戦い明日と定め攻にと
三丁計退き無史殿」く楽つづけ軍威を示」てを発に附る城
中より一騎の狼烟を打上げ雲中又響鏑て見へるが四方八面又
孤勢の諸をつくうし抑うく〳〵と周の勢多筝き浪り陰しく内へ

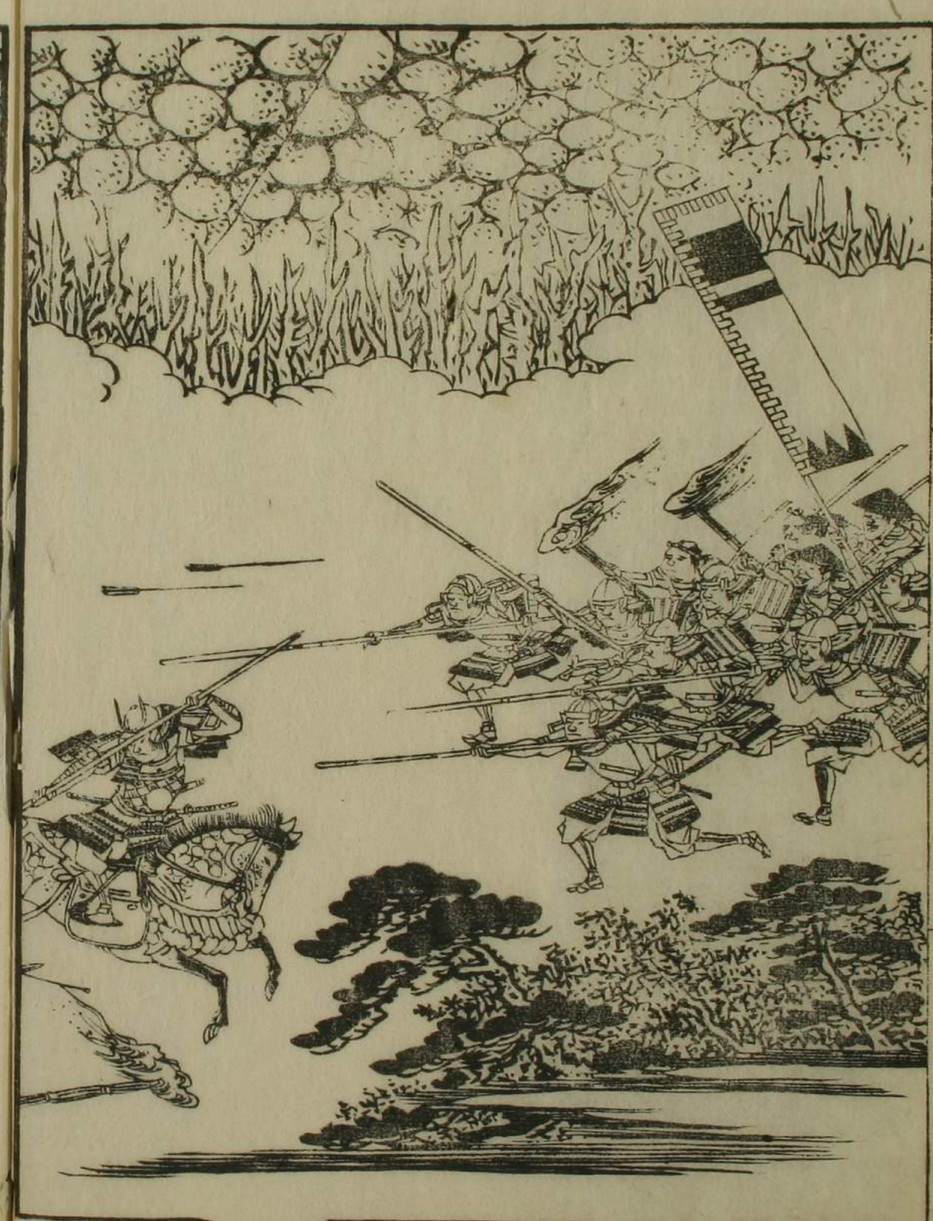
ゐる小田の軍兵こいいふしく駆るきり見れば猪飼丘の後より敵みの
松明と灯しつる勢の多おい見へ神ぐも雲震のごく小田勢の後
を立切矣と抱」鉄砲を放ち喚き叫んぐ討てうる見い事幸ぐ
下知をうけ美宗寺と飛弾守郎を両大将と三又余人を率し
堅仕せ」ぐ和図を見へく寄ふものうり信長見と見へ
てやさしくも謀計と構」もの敵一揆衆の伏兵何方ぐのうやみ
ん勢を引まけ討破さと勝」くと知ある間もうりせに怒勝門
を活と開きか敵寄来寄又抑ひく勇猛の名と抜う謂之方
戦恐寄宮後寄蓮生寄を首と」立家の武士は稔本藤市
郎山名内記三林周防守ゐる松三ゐ懸下向右近ゐると大将とし
一万余人の大軍と率」周の勢山川と動揺」小田の侍へと生へ二つ

小田信長
石山寺
願寺と
表合

実破り崩るを幸と切まわる後より主宗寺亀甚五郎 後殿と
殿は急雨のごとく皆参くと佛敵と討て法恩と報ぜよと呼り
く打立ては小田勢大軍之ともへども前後の敵と戦を討
進退とべきを物と考ひ熱軍是を立るとくとひ〳〵と逃行と
門徒の軍兵得うかゝしと猪先を揃へ実立ば大将信長今
も叶じとたひ籠城の兵と引て西南の方へ迯退と附後と武
士は摩恵多政尤湯門森三尤湯門等僅と三百余人ばかりと
多り山附城と和泉の国と知りぬ是ば月清く東山より秋風冷と
遥りて心がそき小太陽雅波今宮の村〻より俄と岡をつゝり
南西不可思議光如来の大籠月新と翻す神田左衛門佐相良長門
益田兵部等兵湯等尤る余人信長が籠城へ数百挺の後殿と打ける

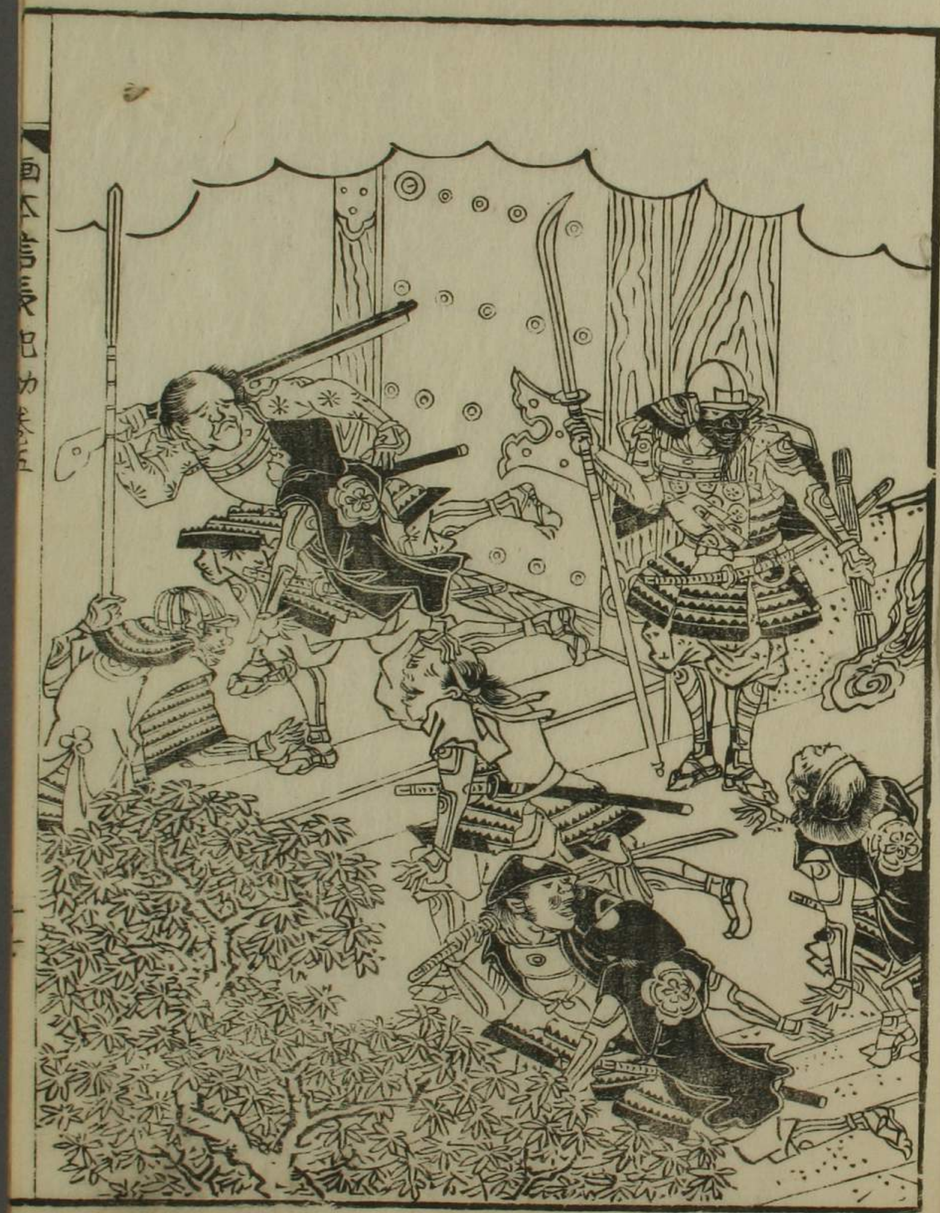
横槍を入て実崩せば信長大きに怒を抑のべき馬と打て逃行を
と小田の軍兵八方へ散乱信長と陸を防せる兵三百余人ばかり
多り信長は道もるき畠の中を延らをるが何所へ落行んとも
うとの方をきゝ見れば南を望小坂勝間の村〻と松明
の光行遠ひ岡の麓もかの方へ多ふいよ〳〵驚き馬の口と東西
平野の郷へ逃行るが実は佛兵乃恐を見ると大念佛
して腰兵糧をつゝひ飢をたをけ暫く息を絶て耳元と後殿
等尤天地も崩るゝ計岡と俄り石山乃大将雲摩右近入百騎
の道率と下知し大念佛寺と元岡〻信長を討く佛敵乃根と
絶せと参〻と罵り嘯と寺門へ実入うり小田の勇士摩恵多
政尤湯門森三尤湯門等人の御方へ附ると思ひ〻れば両人等


絵本
孫市
勇武


西太閤軍記初編五

〻く本軍の縁側より躍り出れば是迎ふる門後勢をとゝこの眼
悪きかの〻〻次四紙地武士の分際として武勇の抽はしまれ御本
陣へ御踏入る命令瞞こはそうびや小田家の勇士摩恵多政庵
門森三左衛門を並の役を見すやとく出ちる六方美四方かざし
群がる石山勢とぞらり〻と薙倒れい兵蒸と叫ん吳ゐ〻び
討る者三十余人に〻義ひ門後勢ぞつと一日ん迎ふる此間
ん摩恵多の森の勇士信長を供奉〻奉〻南をとして又六丁計
走りゐふ西の方より二万余りの軍兵松明ふり立て不人押寄るあり
さま信長見〻欲息猛武運もやあるべしと笑ゐぞ海ゐる
防ぎ矢射〻欲とゐへよ後切んとみゐる所森摩恵多の両人多
を励こい云甲斐ゐつき御後すてこそ以人欲兵何十万ゐて石囲

〻〻百姓一揆ゐに云者いみぞ〻び御逸以人某両人此欲と
退拂ひ〻さんぞるふ道とすゐて落させ給へと云捨て無ん深
〻ゐ方ゐ西こしよせ寄る欲と月新ん遍ひ見れば先ん括板
の級の雑押立欲ゐは〻で明智十云清光秀級軍と集ち
信長卿の御立所を囲寄こ軍勢之見と見〻く信長蘇せ
心地こく先秀いくも集りつるもの武信長見ん〻りと給ゐる
ん先秀馬より飛り諸軍と共ん万歳を唱へ摩恵多森こ
ゐ〻ゐ〻ゐの集ゐと時びゐる此附ゐや疲もかの〻と明
渡こび退く軍兵集り寄くたじめのごく大軍ん取ゐゐ〻ふ
石山勢も寄く寺中へ引入ぬ是ゐ寄く合戦と慌〻此眼を
晴さんもの〻諸勢とまぞゐ再中御の本陣へ引ゐ〻ゐ



信長
手勢へ
級を比

森摩恵多
歌川豊歌

平井口腰矢倉事

実ハ不思議のゆゑのみなるハ小田嘉乃勇臣長又郎左衛門尉長秀勢無軍の人なるしるつゑ心なるまぐ引ゑなるなる若信長の御紋ゆえ来なく〻勝引ゑ方〻と勇めなるなる小平井村の方より門徒勢栗津右近ゑの軍兵南ゑ柳法蓮寺の郷国とかき信長卿の大籏と奪ひいさ〻いさんで中新寺へ引ゑを遣ゑ人〻大きゑ小勢なきゑ若信長卿若や門徒の一揆ゑに討ゑや志落ひん左なくゑも大将の御籏と奪ゑ上ゑ乃恥辱やみん追うけて十の籏と云人せし瞬ゑ乃踏崩一手に追ゑ乃ゑに向ふの堤の小落より六尺余の大男忽然と取ゑ出門徒勢の正中へ踊入祇園の大籏指雑兵と右ゑ〻掴んで七八間さう田の中へ投込籏と奪ひく去んとする祇門徒勢大ゑ驚き追ゑはゑと云ゑ囲むと八面へふゑ側へ囲ゑを乗出南乃方へ走ると見ゑ〻ゑ其ゑ〻ゑ雷光のきとめくゑ似く敵て見と止めく見るもの迄門徒勢大ゑあきれ人間まざゑはゑへうゑと舌と巻て退さうなる者ゑ郎左衛門いゑ者ゑりの姫路をゑんて心腰〻ゑ大ねの御籏を奪ひゑ退い三好方の者ゑ〻ん乃何ゑもなゑ追うけて捕へ来れとく馬御達者の武士を忘〻ゑ報ゑ神と合せく追ゑれど終ゑ捕申ゑゑ終いで安部井の辺りすて見ゑひね何の不思議ゑゑを知り候不思議之ゑるゑもなり

井村城中寄討死之事

中新寺の坊官ゑ下間安察侍法橋新龍ゑゑふ者あり武勇の

信長級軍
明智
光秀
危難と

鎧を着るき者し〻が打負九月の下旬の夕るれだ石山乃赤き
口袴を逸の稲く熟し〻る紙乃く寺内へ刈入臣し〻門徒乃
百姓又百余人牛馬百余疋を引て脱る寺中と出んと欲水重
幸兄と守く急ぎ牧龍る乃へ〻ゆ〻ゆ〻も
出寺兵粮る不足と臣猥りる寺と出く小田勢る元籠らる
逆臣落ひそと徒ろ〻紙牧龍笑く軍師心を労し落ふる及
び我小田勢と乃ゝの嬰るのゞし何ぞ源く兄と恐るん今稲の熟
る府る出く出寺より外元どんび小田方より刈ゝく歌る力
を添ゝ我兄び元を刈臣し〻ゝ幸其いさむべゝ〻ゝる紙乃て
きてやゝるい強て出城せんと乗ゝ落り稼め藤を脱て紛以
く出楽寺及びハ本願河守河辺を馬伏等ふ妻し〻く計略を

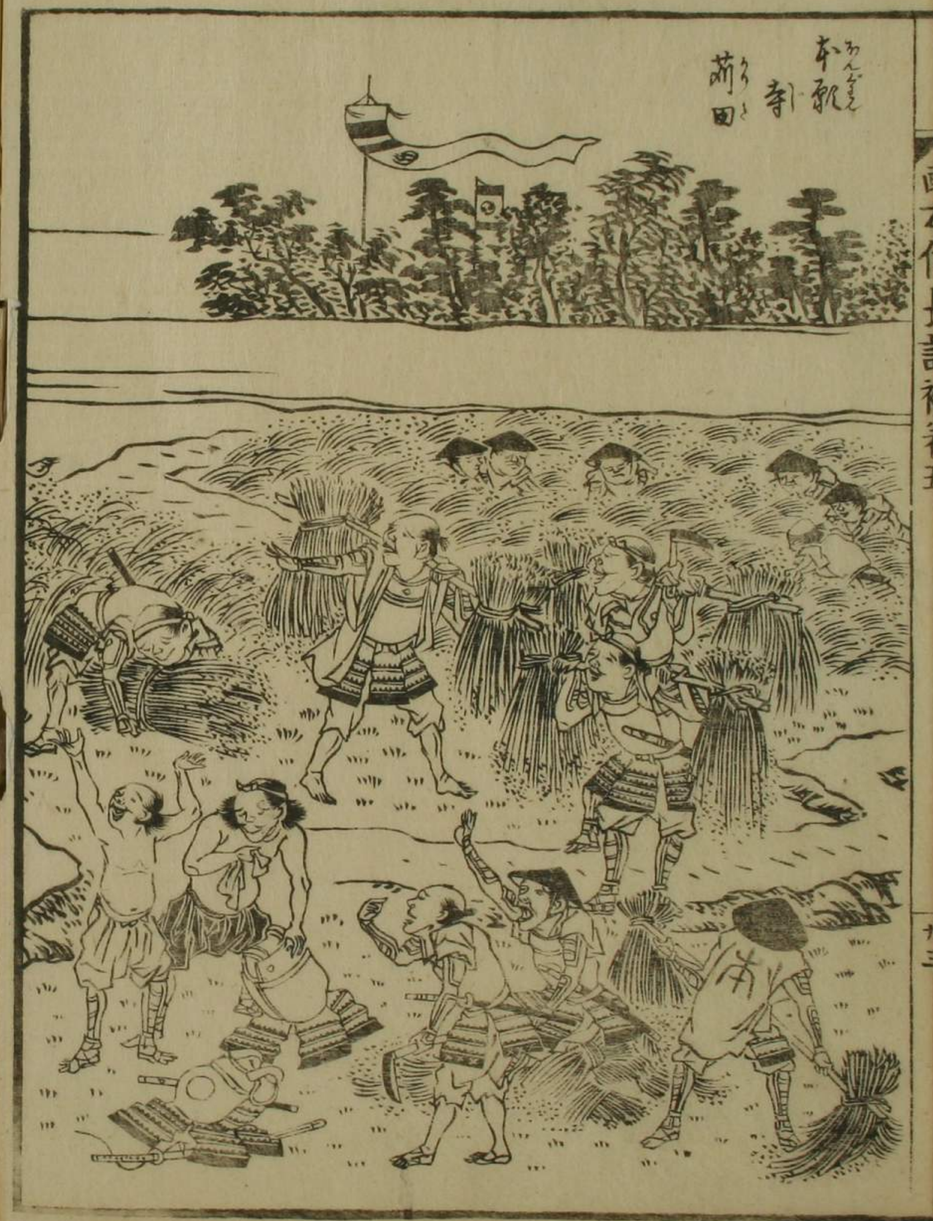
や會ち道幸二る人と分ちと〻へ牧龍と供る打臣む下間牧龍
心よろ〻び寺ハ濃毋堀の乃〻り る出く〻ゝ佐田と刈せる山附
小田方の附城より山伴と乃ん急ぎ信長の本陣へ注進せ〻め
ん毎り雄の若武者刈田を〻る門徒ゝ〻を追ち〻せ〻く二る余
人ゝけ出川城る向ふをのぞ〻乃れば石山勢又百人計歌乃来
る〻知〻ざるふや余念る〻く稲と刈る尤の方の林の中る南無
阿弥陀佛の名号書し白旗二流松風る靡く馬印指物るど
本の間る〻きゝ〻めきゝれば枝ハ伏兵と構へく田刈ゝる〻で森忽〻向
ひ〻不覚ん〻ゝ〻ん〻たゝら〻ふ〻に一人の兵士ゝ〻〻出ていやく〻兄
る歌の寄兵の術ゝく旗馬印と林の内る立並伏勢ありげる味
方とまと臣其間る毋ゝ〻く〻と稲を刈せん計策く其儘授〻と

角蝶

平地口
悔矣

ぞんずるは伏兵を構へて敵を討んと欲する者の旗こと〻け馬不
を立て堅体の地と敵を知り〻る者みうんやたの林の内に軍兵一人
もみぐるしく出て魁もなく川を渡し退散して附入て敵寄とゆふ
こいさ〻立くそやるひろんさ〻ば川と打渡さんと
てを綱のひ繰り進んとする不に又一人の武者押〻めてやゆうハ
いや〻先ハ門後勢の源きを御方ハ其前ハ元来家家の本敵
寺僧北日を〻〻ぐる籠城小いくぐう兵粮を事とをべき心く先
を川田をすせ味方の勢と和出さん計策を必定せう振りを川と
渡して後悔を弱ひてとゆを程を何さま先も理りなりとかくの
評議しる間を石山勢十分を田を刈をく牛を牽せ馬を駐せて
寺中へ立入りの所を信長りの知を立く伝〻内義伝理村孤中

守林彩三郎平戸久助福富平左衛門地〻村三十郎湯浅甚助等
三〻余騎先を争ひ延来りかくと見るとうの論よも及ばず
馬と川中へさ〻と打入我後也と渡りて此附林の中なる白旗勢
めき出門後の軍勢出来樂寺八木後河守河辺主馬伝二を余人川
端の堤へひさ〻と押並びを挑計の鉄炮をつるべ小田勢の中渡る
を見とは二日をぐ〻と打敗せばたまりも敗ば三百余人打倒さ
て流をよりこいふと濁〻を石山勢日高小間と俗う槍先
を揃へ寒来る伝伝〻内義伝理村孤中守槍をえて味方と招き
引る者ども進や人〻一挨弟に後と見せ誰を面と会べきを紀
や〻〻ぼう〻く先を馬と乗出〻近寄敵二十騎計川あを
新渡嗔きを嗔ひて揃合ぐふうる〻川と推渡り討〻討主


本願寺
蒲田

門尖を切り落し弱を削て戦ひ名を惜べきこと也人ざりけせ
家の石山勢の中より黒革威の胴丸の擬を着し桃形の兜を
猪首に着なし双の手に白鞘の大薙刀を打ふり池田源左と
名乗て村瓜中を守と見なげ一文字に討て入る此村が此日の出立の
朱ぬりの具足に狩猟の諸小袖に白けの大鎧の槍と叱〻とぞ見
栗毛なる馬を躍〻せやさ〻き地武士が紛ふる海苔毛の中に黒
ぶく前を立て極楽へ往生させんいさ来し〻く突出し槍の穂先を
ひらりと拂ひ一往一来に絡を懸し出あるしと戦ふ打ち村元
来強勇の者なれば池田が振廻長刀を二三度に五度迄と見
が躍り入て長刀を叩とおり懸し入り出し槍先に引ふせ
ど源左が肩を突通し終に首をぞ取ふる奴首とたゞ引奪

き後者に指せ味方の陣へ引纏て石山勢の内より大音あ
そこ引張ふる地村反紀伊国雑賀の住人志摩与に郎兵衛
さんと呼まわく十文字の槍打ふり一番に突来るを戦中守屋
同に見く何ら臆しも秋蝉をべき忽ちに槍をうゝと合上ざんと
ぶん遣廻るく電光のごとく射計も戦ひ村強勇之こゝへ
ぐも先まりの悪戦に力疲と志摩が槍先を交外し胴抜とぶさ
こ突通され突に命を捨し志摩与に郎を首と云てうくさ
上げ小田方に勇猛の中へ入る地村戦中守と志摩与に郎が討
死をうとうくと呼ふる地村戦中守と志摩与に郎が討
切立れ小田勢たまりうゝく小門後勢競ひうく進撃無量に
とる紙喰うゝく退討に新立ち小田勢討る者教とまゝ

退(のき)くもとゝ久ゝる

編年拾遺信長記初篇巻之五終